
[連載中]3R

冴凧あやか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「連載中」3R

【Nコード】

N8646Z

【作者名】

冴凧あやか

【あらすじ】

すいません、ただいま思案中です

<01>桜の時

淡いピンクの花びらが宙を舞い踊る。

風の速度に合わせ、時に早く、時にゆるりと。

散って行くことが終わりを告げることを意味していても。

悪あがきもせずに、流れに身を任せる潔さ。

公園へと続く道。

道を示すように並べられた桜の街道。

初めて歩く場所なのに、何故か懐かしくさえ感じる。

見上げると、ピンクとも白とも取れる淡い不思議な空間。

その隙間から見える空は、青く澄んでた。

少しの眩しさに顔を顰め、少年は、また歩み始めた。

桜の並木道が終わると、そこは広い公園だった。

綺麗に整備された公園は、中心に勢い良く飛沫を上げる噴水を陣取って、そこを中心にして円形に作られていた。

どうやら目的地に無事着くことができたことに、少年は安堵する。

そして、今度は目的の人物を探す。

「まだ来ていないかな…？」

辺りを見渡してみるが、それらしい人物はいなかった。

仕方なく、誰も据わっていない適当なベンチを探し、腰掛ける。

肩に掛けていたスポーツバックが重い物音を立て無造作に下ろされた。

身軽になったことで、自然と息が吐き出でる。

ジーンズのポケットに手を入れ、携帯電話を取り出し、何となく

時間を確認すると、間も無く一時半が来ることを告げていた。そのまま慣れた手つきでリダイヤル画面を呼び出して確認するが、先ほど電話してから15分も経っていなかった。ぼーっと周りを見渡していると、色んな物が視界に映り、色んな音が耳に流れてくる。

楽しそうに声を立てながら遊具の隙間を駆け回る子供の姿。それを見守りながらも談笑に花を咲かす母親たち。ベンチに腰掛けて楽しそうにしているカップル。そんな人たちの姿が、のどかさを余計に引き立てていた。ふと、先ほどの電話を思い出す。自分から掛けて置いておかしい話だが、初めて聞く声だった。

『はい、葉月です』

駅から掛けた電話は、たった二回のコールで取られた。あまりの早さに少し驚いてしまい、すぐに声が出なかった。

葉月と名乗ったのを聞いて、掛けた相手が間違いではないことは分かる。

女性の声だった。

落ち着いていて、凜とした澄んだ声。

先方に同じ年の女の子がいると聞いていたのを思い出したので、きつとそうなのだろう。

『…もしもし?』

何も云わない相手を不振に思ったのか、念を押して尋ね掛けられた。

『あ、はい…中込悠羅ですけど…』

間の抜けた返事だと思う。

けれど、元々電話の苦手な少年にはそれ以外にどう切り出せば良いのかすぐには分からなかった。

『…駅に御着きになられましたか?』

名前を出したことで気づいてくれたのか、相手は話を続けてきた。

ほっとする。

きつと、バックの賑やかな人の出す音やホームのアナウンスなどが電話を通して相手に届いているのである。

『はい、そうです…。すみません…予定より一時間早く着いてしまつて…』

『…分かりました。すぐにお迎えに上がりたいところなのですが、今すぐは無理のようなので…もしよろしければ、近くまでおいで頂けますか？』

『はい、大丈夫です…お願いします』

『では、まずそこをますつぐに出られまして…』

説明してくれる道筋を周りを見て検討立てながら覚えようとする。

『…です。後はそちらの公園でお待ちいただければすぐにお迎えに上がりますので…よろしいでしょうか？』

『はい…お願いします』

用件を云い終え、こちらが理解したのを確認すると、お待ちしておりますと言う声を最後に、電話は終話された。

用件だけの電話と言うのは、こういうことをいうのだろう。

少し迷ったところもあったけれど、それでも15分くらいでここに辿り着けたので、まあ、初めての場所に来るにしては早かった方だと思ふことにする。

そんな事を考えながらぼーっとしていると、誰かがまた公園内に入ってきた。

同い年くらいの女の子だった。

きよるきよるとしきりに辺りを見回して、誰かを探している様子。ぼーっとして忘れていたが、そういえば自分も人と待ち合わせをしていたのだ。

もしかしたらと思い、はっとして見ていると、どうやら相手もそれに気づいたようで、慌しく近寄ってきた。

目の前まで駆けてくると、軽く上がった息を落ち着けるように、

少し前屈みに胸を抑えながら尋ねてきた。

「あっ、あの…悠羅さん…ですか…？」

ベンチに座っているため、少女の顔の位置の方が高かったので、見上げる形になる。

「はい、そうですけど…？」

なんとなく腑に落ちないのは、先ほど電話した相手の声とは違っていただけからだ。

電話だからだったのだろうか。

でも、自分の名前を呼んだし間違いはないようではあるが…

「よかったあ…会えて…！」

安心したように笑って体制を直す。

青いアンサンブルになった上着と、裾に刺繍の入ったデニムのスカートに紺の靴下。

足元のスニーカーの結び目が解け掛けていた。

よほど急いで来てくれたのだろうか。

「ごめんね、遅くなって…」

すまなそうに謝って来る少女。

「いえ、こっちが早く着すぎたから…すみません」

そういうと、少し嬉しそうにして自分を見てきた。

「迷わなかった？」

「はい…一本道のようなものでしたし…」

「そっか、よかったあ。わたし、ちょっと家にいなくてね、携帯に電話貰って飛んで来ちゃった」

「すみません…」

悪いことをしたと、素直に謝ると、首を振ってそんなことはないのだと云ってくれる。

「わたしが会うの楽しみにしてたから急いで来たんだよー？」

そう笑う目の前の少女に、自分も少し緊張が緩む。

そういえば、急いで連絡を貰ったと云っていたけれど…

先ほどの電話はこの少女の声ではないのだろうか。

じゃあ、誰が…？

そんなことを考えていると「じゃあ、行こっか？」と、荷物を持ち上げようとしながら声が掛かった。

どうやら、自分の荷物を持つとうとしてくれているらしい。

「いえ、自分で持ちますから…」
慌てて持ち直す。

「そう？疲れてそうだし、わたし持つよ？」

「いえ…悪いですから…」

そういうと、少し拗ねた様に窘められた。

「今日から一緒に住むんだから、遠慮しないのっ」
どう返していいか分からず、苦笑する。

ゆっくりと、喋りながらその公園を後にし、また、あの桜の下を通った。

名前を尋ねると、少女は、玲奈と名乗った。

そのとき少し寂しそうに笑ったのが気になったが、すぐに戻ったので何も云わずにおいた。

彼女は、間違いなく自分の叔母に当る人物の娘らしいので、従姉になる。

「ここから、家は五分くらいなの」

そういいながら嬉しそうに少し先を歩きながら、付いて来ていることを確認するように、たまに振り返る。

「桜、綺麗でしょー。ここは結構雪振るから桜前線は遅いほうなんだけどね、今年は早かったみたい」

「そうなんですか…」

同じように桜を見上げてみる。

そして、ふと視線を戻すと、玲奈は自分の方を見ていた。

「…?」

「…あつ、ごめんね」

玲奈は自分が見入っていた事に気づき慌てて目を逸らす。

「う、ううん…何かついてる…?」

「違う違う、そんなのじゃないよ」

「…?」

「ごめんね、ほら、悠…羅くんは覚えてないかもしれないけど、わたしは小さい頃何度か遊んだ記憶があるからね、随分変わったなって思つて。でも、もう十年以上前だし、変わって当たり前なんだよね」

「会ったことあるの?」

「やっぱり…覚えてないんだ?」

寂しそうな笑い顔。

先ほどの名乗ったときのあの顔を思い出す。

「ごめん…」

「あ、謝ることじゃないよ。気にしないで。さ、家もうすぐそこだから」

「う、うん…」

そう言つて誤魔化すように腕をぐいっと引いたかと思つと少し掛け出され、思わず体制を崩すが、何とか持ち直し付いていく。

曲がり角を曲がると、大きな家が見えて、そこで玲奈は止まった。

洋館…と言えるかも知れない。一般住宅と言つよりも、洋館と言つたほうがしっくりとくる大きさだ。

「…ここ?」

気後れしながら尋ねると、嬉しそうに二つ返事が返ってくる。

「ほら、入つて入つて?」

引つ張られ、玄関に辿り着く。

開かれた玄関の中は、予想通り広かつた。

玄関から長めの廊下や、いくつかの部屋の扉や階段が見える。

そして、何より驚いたのは、すぐ目の前にまるで自分たちを待つように立っていた人物の存在だ。

金髪碧眼。まるでフランス人形のような女性。

「お帰りなさいませ」

軽く頭を下げて出迎えるその人は、先ほど電話に出てくれた人と同じ声をしていた。

より鮮明な、はっきりとした声。

「ただいま、ユウナさん。悠羅くん連れて来たよ」

そう言われて、ユウナと呼ばれた人物は、自分の方に視線を向けてきた。

瞬間、その青い瞳と目があう。

「ユウナさんはね、うちのメイドさんなんだよ」

横で玲奈に説明された。

このご時世にと思うかもしれないが、実際の屋敷を見た後だから、メイドの一人や二人いてもおかしくはないと納得する。

「えと、初めまして…今日からお世話になります」

「……初めまして。ユウナと申します。悠羅様」

名前を様付けで呼ばれたことのなかった悠羅はくすぐったさを覚える。

「あの…悠羅でいいです…よ…」

「いえ、私はメイドですから」

はつきりと引かれた一線をそこに感じた。

「ユウナさん、強情だから…」

苦笑交じりに玲奈が悠羅に声を掛ける。

「…」

無表情な彼女からは、感情が読み取れない。

怒っているのだろうか…？

「ほら、ユウナさん、笑って笑って。ユウナさんに睨まれて、悠羅くんびつくりしてるよ？」

くすくす笑いながらそう玲奈がそう諭すと、ユウナが少し顔を赤

らめた。

「に、睨んでなんかいません…っ！」

不機嫌なのではなく、感情を出すのが苦手なのだ。

それに気づくと、安心した。「ユウナさんも、悠羅くんに会えるの楽しみにしてたんだよ、ね？」

わざと玲奈がそういうと、ユウナの顔が益々赤くなった。

「わ、私はメイドとして…」

「はいはい、照れないの」

「玲奈様っ！」

完全に玲奈のペースで遊ばれているユウナを見て、悠羅は笑ってしまう。

「ほら、悠羅くん笑ってるよ？」

「……」

笑い顔の玲奈にそう言われ、まだ赤い顔で少しむっつとして自分を見てくるユウナ。

だが、先ほどとは違い、それが可愛くさえ見える。

「立ち話も何だし上がるうー」

玲奈はそう言って先に靴を脱いで上がると、スリッパを履いた。

「さ、悠羅くんも」

どうぞ、と促され「あ、お邪魔します…」というと、こらっと怒られた。

「ここは、今日から悠羅くんのお家なの。家に帰ったらまず『ただいま』でしょ？」

「え…」

「ほら」

妙に恥ずかしさを感じるが、二人の目に負けて素直に口にする。

「ただいま…？」

そんな様子に満足したのか、玲奈とユウナが顔を合わせ笑い合っ
てから答える。

「おかえりなさい、悠羅くん」

「おかえりなさいませ、悠羅様」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8646z/>

[連載中]3R

2011年12月27日04時45分発行